



## 一人ひとりのニーズに即した教育の保障を願って その2

新井 靖子



会報443号(昨年9月)に上記と同じタイトルで、<その1>を書いてから半年近くが経ってしまった。とびとびの連載で恐縮だが、今回はその続きとして稲田中学校で取り組まれた学校を揚げての冒険的な試みについて紹介したい。

1990年代半ばになると次第に在籍生徒数が増え、多様な特性の子どもたちの個別のニーズにも対応できるように教科によって学習集団の組み合わせを工夫しなければならなくなった。通常の学級で学びたい教科がある生徒は自分で選びその教科の授業は通常級へ行って学べる体制を全校の了解のもとに実施することは続いてきたが、支援級の中でも検討を重ね、国語・数学・英語については興味・関心や習熟度に大きな開きがあるので、学年別ではなく縦割りで3グループに分け、別々の教室でそれぞれに適した課題にとりくめるようにした。その他の教科は合同でおこなったが、音楽、美術などは専門的な知識技能を持った教科の先生達に応援を頼み、それぞれ週2時間を担当してもらい、支援級担任が複数加わり、個々への必要な援助を行っていた。

ところが、私が稲田中に移ってから三代目の小作校長先生は赴任された翌年、支援級への理解を広げるために9教科すべてから一人は支援級の授業を担当させてもらいたい、との爆弾発言をされた。大規模校で比較的教員数にゆとりがあるとは言え、毎週必要な授業時数をすべて受け持ってもらうわけにはいかず、教科毎に関わり方や内容、時間数を支援級担任に考えさせてもらいたいという条件で了承。また、各教科から来られる先生については、持ち時間数との関係で誰でもどうぞというわけにはいかなかったが、「支援級で授業を担当してみたい」と積極的に考える方をお願いしたいということは、職員会議ではっきりとお伝えした。

それぞれの教科の先生方とも話し合い、検討の結果画一的ではない授業形態が生まれた。例えば、国語は週1時間だけ合同の時間を設け、硬筆書写や詩の群読など、どの子も一緒に楽しく学べる題材を用意してもらった。「わっしょい、わっしょい、・・・」という群読などは、文字の読み書きや発語の難

しい人も張り切って参加し、活気のある授業が展開された。数学は到達度の高いグループを担当してもらい、内容を特化して継続的な学習に取り組んでもらった。変化がわかりやすく身近な素材をつかった理科の実験や大きな地図を広げての社会科学習など、専門の教科担任ならではの創意工夫があり、補助で授業に入った支援級担任も楽しく参加でき、教材選定や授業の組み立て方の勉強にもなった。もちろん、双方向の交流で支援級の担任も専任2人を除く他の数人は通常級の授業も担当していた。

一方、楽しそうに、積極的に学習活動に参加する支援級での生徒の姿を見て、通常級で自分を出せないでいる生徒たちのことに改めて思いをめぐらされた先生たちもあり、校長先生の狙われたとおりの効果があったように思う。

授業に来てくださった先生には教材研究や授業準備のお手間を取らせたが、先生たちの要望で教科ごとに係の生徒を決め、先生との連絡、教材教具や配布物を授業の教室に運ぶ活動を任務とした。なにを決めるにも立候補制で、生徒の自主性を尊重するのが習わしだったが、話が苦手で一人ではおぼつかない人や広い校内で迷子になってしまう人を相棒を選んでペアで仕事をしてもらうこともあった。

もう一つ嬉しかったことは、支援級の生徒が日常的に使うことが難しい特別教室、理科室や音楽室などを当然のこととして使用できたことである。学級数が多い学校なので、いつでも自由にとはいかなかったが、体育館や格技室も調整して利用することができた。新任の頃、狭い家庭科の準備室があてがわれた教室で一日の殆どをそこで過ごした生徒たちのことを思い出すと、隔世の感があった。

いま、川崎市内の小中学校の支援級は児童生徒数が増え、今年度の統計を見ると在籍児が20人を超える学校は小学校で半数、中学で三分の一に及んでいる。子どもたちの学習環境、学習内容、個別のニーズへの対応はどうなっているのか、子どもや先生たちは元気で学校生活を楽しめているのだろうか、ご家庭との繋がりは・・・などなど、考えているとたくさんの心配が湧いてきた。 <つづく>